

世阿弥著・市村宏全訳注「風姿花伝」講談社学術文庫、講談社 2011 年 9 月 12 日刊を読む

能に十体を得べきこと

1. 能では十体を習得せねばならぬことがある。
2. この十体を習得したほどの役者は、同じことを一回りずつ繰返して演じても、その一通りやりおえる間が長いから、観客にとっては珍しいであろう。
3. 十体を習得している人は、その十体の中で、それぞれいろをつけたり工夫を加えたりすれば、十体が百種にもわたるであろう。
4. まず五年乃至三年の中に一度ずつも、珍しくやり替えるようなわりふりをするといよい。
5. これは役者にとって大きな安心立命である。また一年中の四季折々の時節を念頭において、上演曲目を択ばなくてはならない。
6. 幾日も続けてする猿楽では、その一日の中のことはいうまでもなく、全期間を通じての風体の変化を考えねばならない。
7. このような大きなことから細かなことまでも自然に気が働くようになれば、一生涯花は失せないであろう。
8. またこういうことがある。
9. 既に十体を知ったならば、次には年々去来の花を忘れるなということである。
10. たとえば十体とは物真似の種類であるが、年々去来の花とは幼年期の風姿、初心の頃のわざ、てわざの盛りの時代のやりかた、老境に入ってから風体など、その時々自分の身についていた風体を、皆現在の芸の中に同時に持つことである。
11. 或る場合には稚児や美少年の能かともみえ、或る時は青壮年期の役者かと思ひ、またはどんなに修業を積んで老功な役者かともみえて、同一人ともみえぬように能をするがよい。
12. これすなわち幼年期から老後までの芸を、同時に持つという理屈である。
13. それ故、これを「年々去り来る花」とはいうのである。
14. 但し、この芸位まで到達した役者は、上体から末代まで見たことも聞いたこともない。
15. ただ亡父観阿弥の若い盛りの時分の能が、十分の年功を積んだ風体を、めずらしくも会得していたと聞きおよんでいるのである。

16. 四十以後の頃からは自分も見慣れたことで、疑う余地もない。
17. 自然居士の物真似をして、高座の上での演技を、その頃の人、十六七の体にみえたなどと評判したのである。
18. これはたしかに人もいい、私自身もみたことで、父こそはこの芸位にふさわしい達者かと思ったことである。
19. このように若い時分、既に将来の年々去来の風体を会得しており、年老いてからは過去の風体をその身に残している役者というものは、観阿弥の外には、二人と見も聞きもしなかった。
20. それ故、初心時代からこの方、身につけた芸能の種類を忘れずに、その時々が必要に応じて、取り出して演ずるがよい。
21. 若い時に年寄の風体を備え、年寄って若盛りの風体をとどめているのは珍しいことではないか。
22. だから芸能の位が上につれて、過去の風体を次々と捨てて忘れてしまうのは、まったく花の種を失うに等しい。
23. その時々にあった花のままで種がなくては、手折る枝の花のようなもの。
24. 種があれば毎年その季節になると、またその花の美にめぐりあえる。
25. 返す返す忘れてはならぬのは、初心である。
26. そんな次第で、常にいわれる評判も、若い役者を、早く上達したとか、老功だなどいって賞め、年老いた役者に対して若々しいなどといって評判するのである。
27. これすなわち珍しいことを讃える道理なのではないか。
28. 十体に変化を加えれば百種にもなろう、その上に年々去来の花の種類を一身に備え、現在の芸に持つならば、その花たるや驚くべきである。

[コメント]

世阿弥の「風姿花伝」(花伝書)に、また新しいテキストが加わった 1969 年に出版された市村宏先生の全訳注版が講談社学術文庫から復刊されたためだ。こんな有難いことはない。ゆっくりと市村先生のテキストに沿い本文を音読し、ことばの意味を確かめ全訳を鑑賞する。「花鏡」も付録で読め、素晴らしい出版の一語に尽る。大いに「風姿花伝」や「花鏡」から世阿弥の精神を学びたい。

－ 2011 年 9 月 23 日 林 明夫記－